



黒川真頼によってローマ字で書かれた百人一首であり、明治6年に文淵堂より出版された『横文字百人一首』の自筆原稿。函架番号H/27。写本1巻1冊。縦18.7cm×横13.7cm。左綴。袋綴。楮紙。表紙は薄赤色。外題は裏表紙左肩に直書きで「横文百人一首」とあるが、1丁表に「横文字百人一首／○凡例」とあるのを白く塗り消した跡があり、当初から「横文字百人一首」であったのを、後人が誤って「横文百人一首」と題したか。「黒川真頼」「黒川真頼蔵書」「黒川真道蔵書」「黒川真前蔵書」他本学附属図書館の朱陽印。

本書は、1面に1首、天智天皇から順徳院までの100人100首の歌が順に並べられている。1面の上部に作者の絵と作者名、歌は下部に1句ごと改行して5行で書かれている。本文は全てローマ字横書き、上に仮名で訓を付す。ローマ字はゴシック体と筆記体を

使い分け、和歌については見開き左に筆記体・右にゴシック体となるように配置する(乱れている箇所もある)。白や朱で間違いを訂正した箇所があり、真頼の草稿の跡が窺われる。絵は白描で、天皇・上皇の顔は御簾で隠す。作者の顔の造作は書き込まれていないが、刊本では引目鉤鼻の大和絵風の顔立ちである。

日本では明治初期頃から、日本語をローマ字で書き表す試みが行われ始め、様々な綴り方の形式が考案された。そんな中、真頼が文部省の命で執筆した本書は、歴史的仮名遣いをそのままローマ字に置き換える形で表記する(ローマ字は表音文字なので、「恋」は「koi」となるが、本書では「kohi」)。これは、発音とは一致しない、いわゆる「仮名式」と呼ばれる形式である。本書の成立以降、ローマ字運動はさらに活発になるが、これはその先駆けともいえる、非常に興味深い本である。